

【今日の説教から】

先週からこの第一ヨハネの手紙を読み進めております。

先週の箇所には「わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わり」とありました。

私たちは遠く神様から隔たっていた者でしたが、今はイエス様の十字架による贖いにより、神に近い者とされ、神の子とされ、父なる神様と、愛する御子とのお交わりの中に入れて頂いているということは何と幸いなことでしょうか。

神様とお交わりに入れられているということは、どういう事でしょうか。

「神は光であって、神には少しの暗いところもない。神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているならわたしたちは偽っている」とありますように、神様は光であって、一点の暗闇もない、そういうお方とお交わりを頂いているということに初めは違和感を感じたのです。私たちの心を探る時、私たちの心の中に一点のやましい所も、身勝手なところも、醜い所もないと決して言い切れないのが私たちであり、そのことのゆえに神様の光の中に出ることに難しさを感じる。連続しない思いが生ずる。そこに恐れず生ずるとするのが私たちの偽らざる思いではないでしょうか。

「御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめる」この一点にかかっているのです。ですから私たちは罪を告白できるのです。そしてすべては光にさらされ、きよめられ、私たちは神様との交わりに入れられるのです。

皆様おはようございます。年が明けたと思いましたが早1月も残すところ10日となりました。今週は最低気温がマイナス6度と、寒くなりそうです。天気予報に雪のマークがありました。皆さまどうぞご自愛ください。

先週から第一ヨハネ1章を読み進めております。今日のテーマは、光である神様とお交わりです。

5 わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。

6 神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っているのではない。

3節にはこう書いてありました。「わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである。」

「あなたがたも、わたしたちの交わりにあずかるようになるためである。わたしたちの交わ

りとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである。これを書きおくるのは、わたしたちの喜びが満ちあふれるためである。」

このように喜びあふれる神様と、信仰にある兄弟姉妹の交わりに入れられたと安堵するも一転、5節6節がありますように、これは私たちに警鐘を鳴らすものです。

神は光であって、神には少しの暗いところもないから、神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っているのではないということです。これは恐ろしい言葉なのではないでしょうか。

光である神様との明々とした、苦労も悩みも悲しみも過ぎ去った永遠の交わりを思いつつも、神様が光であって暗い所が一つもないから、そこに侍らせていただく私たちもまたそのように一点の曇りもないものであるべきである、そうでなければ神様とお交わりを頂くことは出来ないのだから、私たちは神様とお交わりを頂く資格がないものであるにもかかわらず、自分が神様とお交わりを頂いていると偽って物を言っているのだと聖書は語るのです。

赦されて神様とお交わりに入れられているとばかり思っていたものを奈落の底に落とすような冷たい水を顔からかけられるような厳しい御言葉ですが、これはどういう意味なのでしょう。

5 わたしたちがイエスから聞いて、あなたがたに伝えるおとずれは、こうである。神は光であって、神には少しの暗いところもない。

6 神と交わりをしていると言いながら、もし、やみの中を歩いているなら、わたしたちは偽っているのであって、真理を行っているのではない。

ここで私たちは、唯々、私たちの自力によって神様とお交わりに入れられるものではないということを再び教えられます。

神様は光であり、暗い所が少しもない。これには同意します。そして今私たちは神様とお交わりに入れられている。この事もまた真実です。イエス様の贖いにより、私たちは唯々神様の憐れみにより、罪あるまま神様のご愛を頂いて、主の贖いの犠牲により、一方的に無代価で神様からの赦しを頂きました。しかしそのようにして神様とお交わりに入れて頂きながら、闇の中を歩いている、私たちは救われてありながら、しかしだからといって神様が光であって、神様の内に少しも暗闇がないように私たちの内に少しも暗い所がないという所までには至っていないという問題を発見するのです。神様とお交わりを頂きながら、全く光の中に、後ろめたさのない、完全な正義のうちに、神様の正しさの内にはいるものではない。そうです。まさしく私たちは、神様とお交わりを頂く者とされていながら、偽りものあり、真理を行ってはいない者なのです。光の中に照らされれば照らされるほど、私たちは

この欺瞞を感じざるを得ません。私たちが偽りの性質を持っていて、常に真理を行ってはいないということをより強く感じざるを得ないのです。パウロの嘆きの言葉が私たちの心の中にもこだまします。

ローマ 7:24 わたしは、なんというみじめな人間なのだろう。だれが、この死のからだから、わたしを救ってくれるだろうか。

しかし、7節、ここに「しかし」との言葉があります。

7 しかし、神が光の中にいますように、わたしたちも光の中を歩くならば、わたしたちは互に交わりをもち、そして、御子イエスの血が、すべての罪からわたしたちをきよめるのである。

ローマ 7:25 わたしたちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。このようにして、わたし自身は、心では神の律法に仕えているが、肉では罪の律法に仕えているのである。

しかし、しかしです。しかし私たちは、それでも、それでもなお、私たちが弱く、偽り、不真実の中にあっても、それでもなお私たちは光の中を歩むことが出来る。それが御子イエス様の血によるきよめであると聖書は語るのです。そしてそこに私たちの交わりがあると聖書は語るのです。

私たちは自力で光の中を歩む力はありません。しかし神様が尊い御子イエス・キリストの血潮を与え、命を与えて贖ってくださいましたから、私たちは罪あるまま、弱さあるまま、暗さのあるまま光に進み出て、その都度その都度新たな赦しを得てすべての暗闇が光に照らされて光となるのです。ここで大切なのは、私たちが自分の弱さも暗さも、罪も偽りも不誠実も、神様の光の前に認めるといことです。そうしてこそ神様の光に包まれ、神様の光は私たちのすべての暗闇を放逐するのです。その赦されたものとしての交わりが、私たちの交わりです。そこには正しく生きようと願いながらも弱々しい石によって失敗を重ねる自力によっての救済に破綻した者が、ただ神様のあわれみによって罪赦される感謝と賛美の中にある交わりです。

8 もし、罪がないと言うなら、それは自分を欺くことであって、真理はわたしたちのうちにない。

私たちはこの上、もう自分を守ろうと、正しいものであると自己弁護する必要はありません。

教会の中で、世の中で、私たちが立派な者として振る舞い、認めてもらおうと努力する必要はありません。クリスチャンは聖人君子、心の聖いもの、聖人、こんなイメージがあるかもしれませんが、結果的にそうなるのかもしれませんが、私たちは自分が誰よりも醜い面を持っているということを光に照らされて誰よりも分かっている存在であると言い得るのではないのでしょうか。

9 もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。

10 もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とするのであって、神の言はわたしたちのうちにはない。

ここに星野富弘さんの詩があります。

星野富弘さんは1946年、群馬県勢多郡東村（現みどり市東町）に生まれました。群馬大学教育学部卒業後、中学校の体育教諭になるが、クラブ活動（器械体操）の指導中、模範演技で空中回転したとき誤って頭部から転落。頸髄を損傷。首から下の自由を失う。入院中、口に筆をくわえて文や絵をかき始める。前橋で最初の作品展を開く。退院後、雑誌や新聞に詩画作品やエッセイの連載を始める。1982年、高崎で初の「花の詩画展」を開催以降、全国各地、また海外でも開催され、現在も続いている。1991年群馬県勢多郡東村（現みどり市東町）に富弘美術館開館。現在も詩画やエッセイの創作活動を継続中。著書多数。

ここに富弘さんが1981年に菊の絵とともにしたための詩があります。

よろこびが集まったよりも
悲しみが集まった方が
しあわせに近いような気がする
強いものが集まったよりも
弱いものが集まった方が
真実に近いような気がする
しあわせが集まったよりも
不幸せが集まった方が
愛に近いような気がする

よろこびは悲しみよりも素晴らしいものです。強さは弱さよりも素晴らしいものです。幸せは不幸せよりも素晴らしいものです。しかし、時に喜びや強さや幸せが、私たちが神様から遠ざけることがあります。そしてそれらの中であって私たちが神様を求めないようにし、隣

人を遠ざけようとすることがあります。しかし、わたくしたちの悲しみの時、私たちに本当に無くてはならない最上の幸せを理解できることがあります、弱い時こそその中にも訪れる助けに真実を感じ、不幸せな人が集った時にそこに見返りを求めずに変わることなく奉仕し働く愛の光を見ることがあります。

私たちは、私たちが乏しく弱く、悲しく不幸せであった時に私たちを見出し、私たちに仕え、その尊い主イエス様の命を差し出してでも私たちのために愛を貫き助け出してくださった方のことをひたすら考えて、自らの暗闇に絶えず対峙し、神様の赦しと恵みの光を祈り望んで進む道に進み続けたいと願います。

9 もし、わたしたちが自分の罪を告白するならば、神は真実で正しいかたであるから、その罪をゆるし、すべての不義からわたしたちをきよめて下さる。

2 コリント 12:9 ところが、主が言われた、「わたしの恵みはあなたに対して十分である。わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」。それだから、キリストの力がわたしに宿るように、むしろ、喜んで自分の弱さを誇ろう。

12:10 だから、わたしはキリストのためならば、弱さと、侮辱と、危機と、迫害と、行き詰まりとに甘んじよう。なぜなら、わたしが弱い時にこそ、わたしは強いからである。

ヤコブ 4:6 しかし神は、いや増しに恵みを賜う。であるから、「神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う」とある。

4:7 そういうわけだから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ちむかいなさい。そうすれば、彼はあなたがたから逃げ去るであろう。

4:8 神に近づきなさい。そうすれば、神はあなたがたに近づいて下さるであろう。罪人どもよ、手をきよめよ。二心の者どもよ、心を清くせよ。

4:9 苦しめ、悲しめ、泣け。あなたがたの笑いを悲しみに、喜びを憂いに変えよ。

4:10 主のみまえにへりくだれ。そうすれば、主は、あなたがたを高くして下さるであろう。

マタイ 5:1 イエスはこの群衆を見て、山に登り、座につかれると、弟子たちがみもとに近寄ってきた。

5:2 そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて言われた。

5:3 「こころの貧しい人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

5:4 悲しんでいる人たちは、さいわいである、彼らは慰められるであろう。

5:5 柔和な人たちは、さいわいである、彼らは地を受けつぐであろう。

5:6 義に飢えかわいている人たちは、さいわいである、彼らは飽き足りるようになるであ

ろう。

5:7 あわれみ深い人たちは、さいわいである、彼らはあわれみを受けるであろう。

5:8 心の清い人たちは、さいわいである、彼らは神を見るであろう。

5:9 平和をつくり出す人たちは、さいわいである、彼らは神の子と呼ばれるであろう。

5:10 義のために迫害されてきた人たちは、さいわいである、天国は彼らのものである。

5:11 わたしのために人々があなたがたをのしり、また迫害し、あなたがたに対し偽って様々の悪口を言う時には、あなたがたは、さいわいである。

5:12 喜び、よろこべ、天においてあなたがたの受ける報いは大きい。あなたがたより前の預言者たちも、同じように迫害されたのである。

5:13 あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味が取りもどされようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである。

5:14 あなたがたは、世の光である。山の上にある町は隠れることができない。

5:15 また、あかりをつけて、それを柵の下におく者はいない。むしろ燭台の上において、家の中のすべてのものを照させるのである。

5:16 そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。

◇祈禱；天の父なる神様、今日の礼拝を感謝します。光の中、神様とのお交わりになど到底入れない者を、ただ憐れみにより、私たちを「御子イエスの血によってあらゆる罪から清め」、救いと祝福の中、神様と共に、光の中を進ませてくださいますことを心から感謝いたします。どうぞあらゆる苦しめる方々を神様の救いと平安の中にお導き下さい。私たちの家族と、地域の方々を祝福して下さい。主イエス様の御名によって祈ります。アーメン